

## 平成26年度第2回情報教育研究委員会情報専門教育分科会議事概要

- I. 日 時：平成26年10月30日（木）17：00～19：00  
II. 場 所：私立大学情報教育協会事務局 会議室  
III. 出席者：大原主査、須田委員、松浦委員、渡辺委員、高田委員、日立製作所  
（事務局）井端事務局長、野本

### IV. 議事内容

今年度は、分野横断の学びの仕組みについて委員会の方向性をまとめることにする。改善モデルをもとに産学連携の取り組みについて留意点を含めて実験的な提案ができればと考へ、実現に向けた構想を提示したい。

#### 1. 委員の意見

- ・ 分野をこえた学びをつくってはどうか。
- ・ グローバルにも対応できる実践的な能力の検討。
- ・ フレームワークとして2段階にしてはどうか。第1段階では解説なしでもものを見せることで導きださせること。PDCAを理解させ、それにそつての教育では、Pとして、製品サービスについて事例研究として専門家や先生が提示してビジネスモデル化や目的・効果などを構想させる。Dとして、機能やステークスホルダの関係を考えさせる。Cとして、評価させる。Aとして、見直しに入らせる。それで全体を評価してはどうか。
- ・ ステークスホルダーは、課題に関連した方で確定のためには課題と参加すべき全体と個別の検討が必要。
- ・ 実践的な能力として、ビジネスに展開するために文化的な背景を含めて総合的に考へ、利用してもらうデザイン力が求められる。
- ・ 例えば絵画の例では、考へ方を育てるため、テクニックでなく「なぜ描きたいのか心持を持つことが大切」と指導されている。
- ・ 日本ではHow toの教育はしていても人材づくりをしていなかったのではないか。
- ・ 例えば、コンテンツ系では授業モデルの仕組みに当てはめて、ヘルスプロモーションをテーマに人体や健康の向上を目的にしてはどうか。企業コンソーシアムや個人の協力を得る形での具体案を提示してはどうか。
- ・ 例えば、情報通信系ではモバイル端末の使い勝手を考へさせてはどうか。
- ・ 人の代わりのロボットや人工知能など、総合科学としての教育、情報が基になって新しい文化、幸福度をつくいくこと。
- ・ M to M（マシンからマシン、チップからチップへ）全てがインターネットにつながっている。そこに知識が集約され、システムの組合せで新しい価値が創出されるのではないか。
- ・ 仕組みの理解は必要だが、どのようにプログラムを組むか、コーディングをする必要がなくなっている。
- ・ 結果の解を求めずに社会をリードできる発想力を育てること。例えば、体を守る意識を育てる、コンテンツイノベーションの主張、普遍的な意味を持たず、学生が迷わないレベルでのテーマを出す必要がある。
- ・ 企業の協力を得るためには、具体的なテーマから検証し、フレームワークを考へてはどうか。
- ・ PBLの軸と知識を考へる軸を設定すると時間が不足する。例えば、学びの時間が異なる受講として集合教育でなく、Webを利用したものを提言してはどうか。高次のアクティブラーニングコースの設定。
- ・ 反転授業は問題意識を持たせることが重要で教育方向を組み合わせることが有効ではないか。レポート等の結果に対して評価（単位）を与えることやカリキュラムを変える必要が出てくるのではないか。教育はチームティーチングでの実現が求められる。
- ・ 検討対象の製品やサービスなどの目的とビジネスモデルをセットで考へさせる必要があり、新しいビジネスモデルになるものとして教育すること求められる。

#### V. 今後のスケジュール

- ・ 次回の分科会は1月16日（金）14時から開催することにした。
- ・ 教育の構造をPDCAとして、まず、Pの構想力を育成する教育について意見を持ち寄り検討することにした。